

政治とそのメカニズム

—コンラッドの『密偵』について

秋葉敏夫

(1)

「政治化」ということばが、現代のひとつの特徴として、用いられることがある。それを「政治の日常化」といいなおしてもよい。つまり、日々の社会生活の多くの局面が、現代では、政治となんらかのかたちで結びついている、というのである。人びとはそれによって、政治の影響を受けざるをえず、好むと好まざるとにかかわらず、たぶんにその動きに巻き込まれる。しかも現代のように、極度に発達した文明のおかげで、政治的権力と機能が、想像できないほど増大していると、よかれあしかれ、人びとの内面生活まで、その働らきかけにほんろうされる。そこでは、政治的意識の有無は、少しも問題でない。政治的無関心は、それを防ぐたてとはならない。政治が社会生活をすすめるうえの、必須のものである以上、いわんやこんにちでは、政治的かかわりなしに、人びとの生活を考えるのは、至難のわざである。現代は、とりもなおさず、政治の時代といえるだろう。

政治とは、ほんらい、統合論理にもとづく政策決定とその遂行を通して、社会の秩序や平和をめざす、ひとつの創造的ないとなみである。それはまた、究極的には、人びとの利益と福祉を目的とし、その自由や権利を防衛する、働きでもあろう。ところが、現実の政治は、このような政治ほんらいの役目だけに、限られるわけではない。その論理は、しばしば転倒し、逆転するのである。がんらい人間に奉仕すべき政治が、その圧倒的な力によって、ややもすると、人間の生活を脅やかし、それを破壊することになる。なぜなら、政治の世界では、国家や民族という政治的集団が重要視され、構成員の人間は、軽視されるからである。政治にはこのように、その巨大な力を武器とする、破壊的、非人間的側面があり、人びとは政治の主體的な担い手から、よいに、その犠牲者へと転落する。そして、政治のこの冷酷な現象が、いわゆる「政治化」によって、現代ほど身近かなものになっている時代はないといっても、それほど大きな誤りではない。

このような政治の破壊性を直視し、それをドラマ化した作家のひとりに、この小論で取り扱う『密偵』(*The Secret Agent*, 1907)の作者、ジョウゼフ・コンラッド(1857~1924)がいる。彼は生粋のポーランド人で、20歳になるまで、ほとんど英語は知らなかったといわれ、29歳でイギリスに帰化した作家である。幼いとき、帝政ロシアの圧制とそれへの反乱のなかで、独立運動に関係していた父が官憲に捕えられ、彼は病弱の母とともに、父の流刑地に同行する。そして、母はその流刑先でなくなり、やがて彼11歳のとき、父も病死するが、彼には、このような祖国の独立に関する政治活動で失なった、親類縁者が何人かいる。それから彼は、規律の厳格な船乗りとなって、平水夫から船長までたたきあげ、地中海、東洋、オーストラリア等、世界各地をまわるわけである。ところがその間、いちじ、スペインの王位継承をめぐる闘いで、彼はカルロス派に組する武器密輸にまで、手を出したことがある。つまり彼など、体験的に、政治的作家にならざるをえなかったひとでもあって、コンラッドは、いくつかの小説技法のす

ぐれた試みや、人間精神の暗黒面への鋭い探究に加え、冷徹な政治認識の点で、傑出した作家とみなされている。しかも、活躍した時期が、19世期末から20世紀はじめなので、彼は現代のほかの政治的作家たちより、1世代も2世代も、先んじた存在である。

政治的なものに向かう、作家コンラッドの凝視は、その初期の作品から、ずっと輝いている。処女作『オールメイヤーの阿房宮』(*Almayer's Folly*, 1895)では、それはおもに、文明人の優越感や、貿易支配を争う動きとして、とらえられる。2年後の『ナーシサス号の黒人』(*The Nigger of the 'Narcissus'*, 1897)では、もっとも政治的場所のひとつ、上下の規律の明確なところ、船上が舞台である。そこには、義務を拒絶し船上の法と対決する、船乗りの反乱があり、けっして大きくはない帆船のこととて、それは直接、生命の危険と結びついている。翌年の『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1898)になると、帝国主義的歩み、アフリカにおける植民地支配の実態が描かれ、政治の二面性に対する彼の凝視が、前面に押し出される。つまり、表向きはきれいごとをならべながら、実際は、物質的利益追求のために残虐行為が重ねられる、いわゆる強者、あるいは支配者の論理が、ひとつの強烈な発見として述べられる。ただ革命とか、革命家または無政府主義者を素材とするものは、彼の中期、および後期の作品に属している。それらを列挙すると、『ノストロモ』(*Nostromo*, 1904)、『密偵』、『西欧人の眼に』(*Under Western Eyes*, 1911)、それにいくつかの短編である。そして、これらの作品において、彼の政治認識、あるいは政治姿勢といったものが、より明確なかたちであらわされるが、それは前期の作品群のと、けっして異質のものではない。表面的な対象のちがいはどうあれ、彼の凝視は、それを乗り越えて、政治の核心に鋭くせまり、その成果は、すでに、その後の「政治化」の動きと人間の宿命を、的確に予見するものとなっている。

コンラッドの政治的態度は、だいたい、変革の思想を拒絶し現状維持にしがみつくと、非常に保守的なものだった、と考えられている。実際、革命理念や革命家たちの行動を、彼はすべて、いわば本能的を嫌悪をまじえて、愚行ときめつける。政治的にははるかに穏健な、世期末の社会民主主義思想の台頭までも、彼は一大事のように歎くのである。進歩や改革への試みを、不毛な試み、ひとつの破壊に導くものとして、彼はしりぞけるのだが、第一次世界大戦終結後の平和と再建に対してさえ、彼の見通しは、不安と疑問に満ちあふれるものだった。ヒュー・クリフォード卿にあてた、彼の手紙のなかに、次のような一節がある。

ほんとうに戦争は終わりました。でも、わが軍の成功は、確信していました。しかしながら、将来の見通しはまったく暗いもので、私はどうしても、不満をおぼえ、心配せざるをえないのです。理性的というより、本能的にそうなるのかもしれませんが、それでも、現在、平和と再建問題に取り組んでいる雰囲気には、なにか不吉なものがあるのを、否定することはできません。……まるで、足もとのすでに動いている地面に、テニスコートを作るようなものなのです。

このような心情は、さまざまなかたちで、彼の多くの作品にみられるものである。それをばくぜんと、秩序と平安のうえに安住したい作家の、危機感の表明とってよいのだろうが、革命や革命家に対する攻撃がいつも厳しいにせよ、それでも彼は、政治的に右側に片寄るわけではない。彼の関心は、逆転した政治の統合論理であり、個人性の無視される、政治の力のメカニズム、その冷酷なうごめき、にはかならない。コンラッドの保守主義は、彼自身そうだった、政治の被害者として感じる、政治への恐れ、あるいは不安といったものに、かなり近いのである。だから、アルバート・J・グラードのいうように、彼にとっては、「ある制度、または手段(とりわけ、資本主義、帝国主義、革命、それに政治論説さえ)は、もともと破壊的である

か、むだなものとみなされている²⁾。」そしてこういう態度は、同時に、政治全体に対する根強い懐疑を、含むことにもなる。彼自身、政治の破壊性のうえに、右であれ左であれ、政治にたずさわる人間の、倫理的腐敗を付け加えることで、その懐疑を、いっそう強固な不信にまで、たかめるのである。政治とは、彼の場合、人間の幸福を保証するものではなく、明日の生活を豊かにしてくれるすべでもない。この小論は、彼のいくつかの政治小説のうち、その政治的見解を端的にあらわす、『密偵』を中心に、ジョウゼフ・コンラッドの政治意識について、考察しようとするものである。

(2)

革命期の国家の動きと、そのなかの人の運命を描く、壮大な小説、『ノストローモ』を完成してから、コンラッドは、海に関する随筆を気晴らしに書きながら、ますます、政治的関心を深めていった。1905年には、国家権力の横暴を扱う論文、「専制政治と戦争」(‘Autocracy and War’)があり、そこで彼は、ロシア専制政治の非人間性を攻撃し、当時盛んだったドイツ民族主義の勢力拡大に、人びとの注意をうながした。そして、この年の後半には、短編小説だが、政治的雰囲気濃厚なものが、3編書かれている。つまり、革命に巻き込まれて、運命を狂わせられる人間の物語、「ガスパー・ルイス」(‘Gaspar Ruiz,’ 1906)と、無政府主義者の秘かな動きを扱う、「無政府主義者」(‘An Anarchist,’ 1906)と「密告者」(‘The Informer,’ 1906)である。『密偵』は、これらの作品にすぐ続く、作者49歳のときの、いわば円熟期の作品である。物語の素材は、例によって、現実の事件からとられており、2、3の登場人物の創造には、当時の出版物の助けがあったらしい。こういう事実は、しかし、ほんの表面的なことにすぎない。要となる細部の肉付けが、独自の危機意識とすぐれた政治認識で塗り込まれる、作家の想像力の所産であるのはいうまでもない。それにまた、この素材のたぐみな料理には、技巧家コンラッドの、さまざまな苦心を見逃すことはできない。そういった検討は別の機会にゆずるが、ただここには、そのいくつかの例として、暗い、不吉な予感をかもしだす、イメージの効果的な積み重ね、現実の過程にそくした、時間の処理(フラッシュ・バック)、陰うつな主題に適合した、アイロニーの使用などを、あげておいてよいだろうか。これらのうち、とくにアイロニーは、物語のすみずみにまでゆきわたる、作品の基調といえるものである。それは、たとえばダグラス・ヒューイットのことばを借りると、『密偵』のアイロニーは、……いわゆる攻撃的である。それは心地よい仮定を脅やかす、ひとつの武器であり、われわれの信念や価値をより深く吟味させる、ひとつの武器である³⁾」ということになる。

『密偵』の世界は、大ざっぱないい方だが、家庭的な側面と政治的な側面の、ふたつにわけられる。そして前者の家庭的な側面は、ロンドンで小市民的生活を送る、ヴァーロック家であらわされる。その中心はヴァーロック夫人であり、後年つけられた「作者の覚え書」によれば、この作品は、「まったくの悲しみ、狂気、絶望という、その無政府主義者的結末にいたる、ウィニー・ヴァーロックの物語⁴⁾」となる。しかし、物語がウィニーの視点ですすめられるわけではなく、彼女の登場がほんの後半にすぎないので、その注釈はいささか不十分に思われる。『密偵』は、はじめ、「ヴァーロック」という短編のはずだったもので、題名の密偵とは、彼女の夫、ヴァーロック氏のことである。そして、作品の政治的な側面は、たぶん、彼を使うロンドンの某外国大使館、それから、彼を取り巻く無政府主義者、および彼に通じている警官などの世界であらわされる。それは彼を通して、家庭的な側面と結びつけられるが、そういう過程で、作家の凝視する、政治の破壊的なメカニズムが、端的に示されてくる。ここでは、まず、彼の人生観の反映でもある、ヴァーロック家とはいったいどんな家庭だったのか、そんなところから、

話をすすめてゆこう。

ヴァーロック家は、ロンドン、ソーホー街の、陰気でむさくるしい街角に住む、4人家族の、なんのとりえもない家庭である。この家は、薄汚ない、小さな店を経営し、いかがわしい写真や新聞、雑誌、それに文房具などを売っている。家庭はヴァーロック夫妻と、夫人自身の、足の悪い年老いた母親、および精神薄弱の弟である。夫人は、髪をこぎれいにした、肉体派の、まだ若い女で、家の中心として、もくもくと働いているが、父の死後、病弱の老母と白痴の弟を抱えているため、自己犠牲的な、暗い青春時代を過してきた。彼女が、自分だけしか養ってもらえない、若い男との恋愛をあきらめ、もう中年の、怠惰だが金のありそうな、ヴァーロック氏と結婚したのは、まがりなりにも、彼がふたりの面倒までみてくれる、と思ったからである。得体のわからない、この男の仕事がなんなのか、夫人は知らないし、またたずねようともしない。ヴァーロック氏のほうは、密偵としての生活を隠すため、彼女と結婚し、ほんの名前だけの、小さな店を開いているにすぎない。たがいに利己的な理由で相手を求めたから、ふたりの間に、愛情はないし、思いやりや理解といったものもみられない。そして、母親は母親で、娘の悲しい心が読めず、魅力的な若い女がどうしてこんな中年男と結婚したのか、不思議に思っている。また、白痴の少年は、ただひとり、自分の小さな世界に、閉じ込められているだけである。ヴァーロック家は、このように、いわば夫人の生活信条、「事実の内面に注意を払わないこと⁶⁾」が、家のすみずみにまでゆきわたり、各自、あたりさわりなく、自分の思い思いに暮らしている、家庭である。それはいまにも崩壊しそうな家庭だが、これでもヴァーロック夫人は、なんとかがまんでくる、まともなものだと考えている。

そして、こういうさくばくとした家庭が、ロンドンの陰うつな、不気味なすがたを背景に、現代社会のひとつの典型として持ち出される。それがまをえているかどうかは別として、やるせない運命をまえに、いかにも守勢の人びとの卑小なあがきが、安っぽい文明で作られ、浅ましい政治で守られている、大都市ロンドンで展開される。「そこには、どんな物語を嵌め込むのにも充分な空間と、どんな情熱を入れるに充分な深さが存在し、いかなる背景にも適した多様性と、500万の人間の生命を呑み込むのに充分な、暗黒が存在した⁷⁾」ということだが、「作者の覚え書」のなかにみえる。しかも、陰気なロンドンの表情は、まるで、「どろどろと水の流れ出た養魚池⁷⁾」のようであり、それはたしかに、汚濁と腐敗と死のイメージにあふれている。『密偵』の世界は、ほとんど、こういう大都市ロンドンの、暗い基調で塗りつぶされ、現代都市の不安定な人間生活、表面はどうあれ、いまにも危険におしつぶされそうな人間生活が、悪夢のように、描き出されてゆくのである。いったい、「500万の人間の生命を呑み込む」あの「暗黒」とはなんなのか、そんなことを問いかけながら、話をまえにすすめてゆきたい。

そこで、物語を簡単にまとめてみると、密偵のヴァーロック氏は、みずから無政府主義者になりすまし、自分の家に集まる、無政府主義者につきあっている。そして彼は、その探った動向を、在英ロシア大使館と思われる某外国大使館に、売っているのである。しかも彼は、警察にも通じており、また、そういう生活をごまかすため、結婚して、小さな店を開いている。それはいかにも特殊な生活のようだが、彼にとっては、いわば、共同社会の一員として、その秩序と平安に安住し、「なまけもので夜ふかしで、朝は夜具の下から、寝むような顔で冗談をいう⁸⁾」ことのできる生活なのだ。ところが、ある日、彼は自分の関係している大使館から呼び出され、ひとつの命令を受け取る。つまり、なにか警察に衝撃を与えるような事件を起こし、無政府主義者に対する警察の取り締まりが厳しくなるようにせよ、という命令である。そして、どこのだれでも知っている、グリニッジ天文台爆破を指図され、その実行に、1カ月の猶予が与えら

れる。彼は四方八方、大陸にまで足をのばし、その手先きとなる人間を捜しまわるが、それは結局、徒勞に終る。ヴァーロック氏は、いままでにない苦しみを覚え、自分は危険を犯して無政府主義者と接触し、その行動を大使館に報告している、大使館にとっては貴重な密偵なのだ、と考える。しかし大使館のリストには、彼のような人間が、何人も登録されているのである。やがて彼は、精神薄弱の義弟、スティーヴィーが自分に献身的であることを知り、またスティーヴィーの、彼なりに描いたひとつの世界悪と、それへの憤りに助けられ、天文台爆破の計画に、この白痴の少年をそそのかす。ところが彼は、起爆薬の入ったかんを持って、指図された場所にゆくとき、途中で、古い樹木の切り株につまずき、自爆してしまうのである。この事件の真相は、すぐに、警察の捜査から、ヴァーロック夫人の耳に入る。そして、だれにも相手にされない弟を、母親のように世話してきた彼女は、夫の弁解のことばに耳を傾けず、その和解の誘いに従うようにして、ヴァーロック氏を殺害する。夫人は、そのあと、自分のたどるべき、絞首台の幻影におびえる。その幻から逃がれようとして、彼女は、ふと出会った、まえから家に集まり、自分に好意を持っている、ある無政府主義者に、助けを求める。しかし彼女は、ヴァーロック氏殺害の事実を知った、その男に捨てられ、絶望のあまり、海峡横断の船から飛び込んで死ぬ。

『密偵』の主題は、たとえばジョスリン・ペインズのいうように⁹⁾、やや明瞭さを欠くきらいがあるが、確かなことは、それは少なくとも政治的なものと結びついている、ということである。それをまた、現代社会を取り巻く、「政治化」の破壊的な動き、といいかえてもよい。ヴァーロック氏は、実のところ、政治的関心は薄っぺらで、平穩な自分の生活に満足している、普通の人間である。たとえ密偵であるといっても、彼はただ、大使館のリストに登録された多くのなかの、ほんのひとりにすぎない。効果的な描出という点では、少し疑問も残るが、やはり、彼の創造のなかにみなければならぬのは、まず、作家が繰り返し取り扱う、政治にほんろうされる犠牲者のすがたである。ところが、彼はまた、弱い白痴の義弟を利用するという意味で、ほとんど無意識的に、冷酷で自分勝手な政治的性格をあらわし、まさに非情な「政治化」の動きを、体現してもいるのである。

政治とは、いわば、力のメカニズムである。それは、ものともとの、あるいはひととひととの、影響関係であり、支配と服従の関係である。その様式はさまざまだが、その背後には、程度の差こそあれ、力による強制が存在する。これは、それ自身では、よいとか悪いというものではなく、ただ危険性を内包した、政治の原理を示すものにほかならない。『密偵』では、この政治のしくみが、単純化すれば、大使館対ヴァーロック氏対スティーヴィー、という関係でとらえられる。そして大使館はあくまでヴァーロック氏より強く、ヴァーロック氏はあくまでスティーヴィーより強い。もしヴァーロック氏が、政治におしつぶされる人間のひとりなら、スティーヴィーもまたそうであり、その波紋は、結局は、ヴァーロック夫人にまでおよぶわけである。政治は、このように、弱者が強者に利用され、その犠牲者とならざるをえない側面、いわば弱肉強食の性格を秘めている。政治を扱う、作家コンラッドの偉大さは、ひとつには、彼自身そうだった、犠牲者の視点から、彼が政治のこの本質をとらえ、「政治化」の動きとその破壊性を、見通した点にあるだろう。『密偵』の、教授とあだ名される無政府主義者は、仲間の考える、強者が弱者を保護する世界計画をあざ笑い、作家のものにちがいない、政治における弱肉強食論を、極端なかたちでだが、次のように喝破する。

「おれはやつにいつてやったよ、おれの夢みる世界はいわば屠殺場のようなもので、弱いものはまったく皆殺しにされるんだ、とね。……はじめに、ものすごい数の弱者が死ななければ

ならない、それから、あまり強くないものが死ぬのだ。わかるかな？ 最初にめくら、次につんぼとおし、それからびっこや不具者、というふうにさ。どんな汚点も、どんな悪徳も、どんな偏見も、どんな因襲も、必らずや滅びなければならないのだ」

「それで、だれが残るんだ？」とオシポンは、息をつまらせてたずねた。

「おれが残る——もしそうするほど強ければ」血色の悪い、小さな教授はこう断言し、その大きな耳が、まるで薄い皮膚のように、もろい頭蓋骨の両側から突き出ているが、とつぜん、まっ赤な色合いをおびた¹⁰⁾。

そして、政治のこのおそろしい性格を、具体的に、もっともよくあらわしているのが、作品の政治的領域の代表者、在英ロシア大使館と思われる、某外国大使館の一等書記官、ウラジミール氏である。この人物は、表面的には、社交界の人気者になるほど、洗練され、ひとづきあいはいいが、彼はその背後に、人間を蔑視する、冷酷な態度をのぞかせる。新任のこの書記官は、ヴァーロック氏のそれまで11年間の功績を、情緒的に高く買うようなことはしない。彼はまさに、冷然そのもので、自己の正当性を主張し、目的のためには手段を選ばない、いわゆる強者の論理の持主である。聡明な書記官は、テロ行為の真の価値を熟知しており、いま、条理を絶した、純粹に破壊的な行為を、ヴァーロック氏に指図している。その際、彼は、ふと、こんなことを、「ほんとうにこわいのは狂気だけだ。おどしても、説得しても、あるいはわいろを使っても、なだめることができないのだから¹¹⁾」という。だが、このことばほど、彼の心の奥底を、卑劣で冷酷な政治的性格を、端的に物語るのは少ない。ウラジミール書記官は、結局、グリニッジ天文台爆破を命令するのだが、この政治的人間は、たくみに、その動機の純粹性をまくしたてる。

「……それに、わたしは文明人でね。たとえ最高の結果が望めたにしても、わたしは君に、たんなる殺しをやらせてもらおうなんて、夢にも思やあしない。しかも、ひとを殺して、わたしの望む結果が期待できるわけじゃない。……示威運動は学問に向けて行なわなければいけない、——学問といっても、科学だ。だが、どんな科学でもよいというのじゃない。その攻撃は、おそろしく無意味な、いわれのない冒瀆性を、どこまでもそなえていなければならない。君の表現手段は爆弾だから、もし純粹数学に爆弾を投げ込むことができれば、ほんとにききめがあるんだが、でも、そんなことは不可能だ。……それで、ひとつ天文学をねらってみるのはどうかね……？ おそらく、これほどうまいことはない。そのような行為は、人間性への最大限の考慮と、もっともおどろくべき、狂暴な愚かさとを組み合わせたものだからだ。……¹²⁾」

天文台爆破というのは、確かに、君主や大統領殺害とは、異なる面をもつだろう。しかしながら、たんなる殺りくを回避する、ウラジミール書記官の配慮は、行為の結果に対する責任を、含むものではない。彼にとって、動機の理由づけは、いわば、どうにでもなる、まったくの単純作業なのだ。彼の論理のなかでは、個人の尊厳が無視されるばかりでなく、人間は利用できるものであって、たんなる道具と化している。そして、こういう強者の思考は、作家コンラッドの、もっとも注視するもののひとつで、そのことは、たとえば『闇の奥』の死の森の地獄図を、思い出してもよい。そこでは、暗黒大陸の開拓という美名のもとで、人びとはまったく合法的に集められるが、彼らは、慣れない食事や気候のため、病気になり働けなくなると、そのまま捨てられ、死んでゆく。この地獄図は、ただそれだけで、植民地支配の実態を告発するのに十分な場面だが、それはまさに、ウラジミール書記官の巧妙で強制的な態度と、同じ性質のものだろう。彼を通して浮かんでくるのは、それ故、弱者の上に君臨する強者、あるいは支配者の、身勝手に冷酷なすがたにほかならない。それはまた、彼が在英ロシア大使館と思われ

るところの一等書記官なので、体験的に作家の体内に食い込んだらしい、彼のロシア専制政治への敵意、およびそれへの恐怖のあらわれといっても、たいした間違いではないだろう。作家自身のことばを使えば、それは、「人間の尊さ、正直さ、高潔さの、そして人間性の誠実なことがらすべての、野蛮な破壊¹³⁾」に対する敵意であり、そういう破壊に対する恐怖である。

ところで、すでに述べたように、『密偵』は、主題がややあいまいで、物語にそくした中心人物をだれと考えるべきか、いささか困難な点がある。むしろ、『タイムズ文芸附録』の書評家の書くように、「『密偵』は、ひとつの物語というより、なるほどちゃんとした物語でもあり、実際、ひとの心をはらはらさせるものだが、物語というよりは、人物陳列場といった感じが強い¹⁴⁾」と思われる。この作品について、作者のコンラッドは、「わたしの目的は、ひとつの物語を語るというのは別にして、ある人びとの無価値さとほかの人びとの下劣さとを、かかげることだった¹⁵⁾」と、アンブロウズ・J・パーカーあての手紙のなかで述べた。それが具体的にどの人物たちを指しているのか、明確ではないし、また、ほとんどの人物にあてはまるともいえるが、『密偵』の政治的領域には、さらに、ヴァーロック氏のまわりにたむろする、革命家あるいは無政府主義者の世界がある。彼らの描写は、かなり特異なものであったので、コンラッドは、弁解がましく、「わたしは、アナキズムを政治的に考えようとは、思いませんでしたし、哲学的な面から、それを真面目に取り扱おうとは思いませんでした¹⁶⁾」と、友人のジョン・ゴールズワージーあての手紙でいっている。だが、たとえそのような傾向があったにせよ、彼らに対する扱いは、少なくとも、彼が公平に遇することができないほど、彼の心の反映であり、そこにもまた、彼の政治的態度といったものが、端的にあらわれてくる。そしてその態度も、大ざっぱないい方だが、いわゆる作家コンラッドの被害者意識、あるいは犠牲者の視点から、政治への期待ではなく、政治への恐怖の方向で、とらえることができると思われる。いったい、『密偵』の革命家や無政府主義者は、どういう描かれ方をしているのか、そちらに話を移してゆきたい。

『密偵』に出てくる革命家や無政府主義者は、全部で4人で、彼らはほとんど、作家のあからさまな軽蔑と敵意で、塗り込まれる。コンラッドは、けっして、思想と行動の両面で、立派な革命家たちの群像を描かないし、いや、描くことができない。彼が攻撃するのは、革命家たちのひとりよがりな政治思想の浅はかさであり、その実現の不可能さ、その動機の不純さである。彼らは、めいめい、自分の空想の世界に浸り込み、その実現のために、たがいに、一致団結することはない。彼らは、みずから行動に赴かないし、また、精神および肉体的に、赴くことができない。作家コンラッドは、彼らのそういう言行の矛盾を、それぞれ、すこぶる皮肉な調子で提出する。仮出獄者のマイケリスは、ふとりすぎた体つきで行動も鈍くなっており、いまでは、ある金持の婦人に養われている、楽観的な空想の持主である。老テロリストのカール・ユントは、いまや、痛風の張れた、ふるえる手でステッキにすがり、勇敢な破壊者を夢みても、もはや肉体的についてゆけないし、これまでも、実際の破壊活動には、小指一本動かしたことがない。また、前医学生、同志オシポンは、粗野で頑丈な体つきの持主だが、文筆による宣伝活動に従っていて、自己の思想に満足するとともに、かたや、預金通帳を持った、ばかな娘たちを追いかけている。そして、彼らの行動を探る、ヴァーロック氏の眼にも、彼らはただ、彼の休息と安全を脅やかす以外、なにができるか疑わしい、まったくくだらない人間と映っている。いっぽう、もうひとりの革命家、教授とあだ名される人物は、貧弱な体格の小男だが、徹底した反社会的破壊活動に、社会の再生を夢みる、おそろべきニヒリストである。彼は爆弾作りの名人で、自分の作った、破壊能力60ヤードにおよぶ爆弾を、いつも持ち歩いていて、警察からも嫌われている。だが、そんな彼も、動機といつては、自分の才能を正当に扱ってくれ

ない、世間に対する復讐であり、彼の個人的な虚栄心、あるいは自己顕示欲といったものにすぎない。「どんなに正当な革命の道も、信条とみせかけた、個人的衝動によって準備される¹⁷⁾」というのは、これらの革命家あるいは無政府主義者に与えられた、作家コンラッドの、いわば本心である。彼らはまさに、政治の限界をみすえた、作家の懐疑に根ざす、あらわな嘲笑と、そして、政治の不条理な力を凝視する、作家の恐怖から生まれた、ほとんど憎悪に近いもので、攻撃され、戯画化される。

このような態度は、『密偵』の次の大作、『西欧人の眼に』においても続けられる。革命家や無政府主義者のまともな思想や行動は、けっしてとりあげられず、彼らはそこでも、ただひとりよがりの夢に生きる、言行不一致の、薄っぺらな群像にすぎない。彼らもまた、いかげんな地下運動に没頭する、卑小で俗悪な人間の典型として、同じように、激しい調子で攻撃されてゆく。革命について、そしてそれにたずさわる人間について、『西欧人の眼に』の語り手が次のように話すのは、おそらく、コンラッド自身の思いから、少しも離れたものではない。

「ほんとうの革命では——たんに王朝の交代とか制度の改善でなく——ほんとうの革命では、最良の人物が前面にあらわれることはない。暴力的な革命は、まずはじめに、偏狭な狂信者と専制的偽善者の手に入る。そのあとに、次から次に落伍する、うぬぼれた知的野心家の番となる。そういう人びとが首領であり、指導者なのだ。むろん、たんなる悪党は問題外でね。良心的な人びと、公正な人びと、けだかい、心のやさしい、献身的な人びと、あるいは没我的な人びとや聡明な知識人が、もしかしたら、運動をはじめのかもしれない——しかしそれは、彼らのところから離れてゆく。革命の指導者は彼らではない。彼らはその犠牲者なのだ。あいそをつかし、幻滅を感じた犠牲者——そしてしばしば、後悔にあげられる犠牲者なのだ。希望はばかげたやり方で裏切られ、理想は戯画化される——成功した革命というのは、そんなふうに定義されるものさ。……¹⁸⁾」

コンラッドにとっては、進歩や改革は、けっして前向き、建設的ないとなみではない。それはすぐにももとにもどる、ほとんどむだなことであって、浄化作用に値しない、表面の変革、たんなる名称の変更にすぎない。その当否を政治学的に、どうこう論じてはじまらない。いってみれば、歴史は繰り返すという、彼の歴史感覚は、なんらかのかたちで、彼の政治小説をおおうものである。それはまた、彼の冷徹な政治認識にもとづいているので、革命家や無政府主義者を正しく扱っていないという、彼に対する不満を弱めるのに、おそらく充分である。物語の効果が損われるのは別として、彼の眼には、彼らはほとんど、たとえ社会が不完全なものにせよ、その秩序と平安を脅やかす存在であり、ひいては、そこの平凡な住民を巻き込む、政治活動の担い手なのだ。ところが、そういう危機意識を感じる、この防御的保守家は、ただ革命家や無政府主義者の扱いのなかに、政治への懐疑という、自己の政治姿勢を示すだけではない。彼はさらに、彼の頼りとする、別の政治世界にたずさわる人間、社会の秩序と平安を守る、警官たちの醜い実態を付け加えることで、彼のその姿勢を、いっそう決定的なものにする。

政治とは、また、ひとつのかけひきの世界である。そこでは、目的のためには手段を選ばぬ傾向から、倫理的腐敗が生まれつき、それがややもすると支配的になる。人びとは、しよせん、政治のために働らくというより、政治によって生活する、卑小な人間にすぎず、そのとりひきとかかけひきのもたらす、人間性喪失や非合法性に不感性となる。このことは、警察という、もっとも法を守るべきところでも、例外ではない。作家コンラッドは、まさにアイロニカルに、その警察を使い、自己の認識にほかならない、官僚組織の一見能率的、合目的性の背後にひそむ、政治のただれた世界を、作品のなかに持ち込む。『密偵』のヒート主任警部は、ヴァーロツ

ク氏とこっそり通じ、彼のまわりの無政府主義者の動向を、いつもつかんでいる。そして彼から与えられる情報で、警部はすぐれた功績をあげ、他よりも早く、現在の地位を得ているのである。有能な警部として評判も高いし、自信もあるが、彼もまた、ただ自分勝手な、個人的動機で動く人物にすぎない。

こういった性格があざやかに描かれるのは、物語のかなり多くの部分を占める、天文台爆破の捜査のときである。主任警部ヒートは、現場の遺留品から、すぐ、ヴァーロック氏が怪しいとにらむが、彼としては、貴重な情報源で、ひいては自己の昇任ともからむ、この人物を、犯人にしたくない。そのかわり、警部は、ヴァーロック氏の探っている、無政府主義者のうちのひとり、仮出獄中のマイケリスに、罪をもってゆこうとする。そしてその十分な証拠を集めるのは簡単なことだ、と彼は自信たっぷりにいう。ところが、警部の上司である次長は、マイケリスが犯人として捕えられ、投獄されることに危惧をおぼえる。彼はいままで、妻の親しい友人で、このマイケリスの保護者でもある、上流階級の有力な貴婦人から、かなりの好意を受けていた。だからマイケリスが犯人にされると、彼はその貴婦人の激怒をかい、彼女から相手にされなくなるだろう、とおそれる。こうして警部も次長も、それぞれ、別々の思いで捜査にあたるわけだが、ここらでは、厳正であるべき公的な職務が、いかにもみみっちい、私的な目的で動くという、警察内部の一面がたくみに描き出される。それにまた、内政に十二分な注意を払うべき国務大臣、エセルレッド卿は、事件に腹をたてているが、実際には、その詳細をあまり聞こうとはしない。彼はただ、いわば事件の象徴する、社会の危険性をほとんど感づかないで、自分の提出した漁業法案に、心を奪われているだけである。だが、そういう警察内や大臣の描出は、世間をおどろかす、たんなる実態の暴露ではない。問題なのは、こういった人物が政治の執行者、推進者として、少なくとも法を守っているという事実であり、そこから、どのようなものが期待できるか、という問いかけである。作家コンラッドが、頼りとする側にも、そういう人間しか描けないというのは、政治への懐疑という点で、結局、あのような無政府主義者しか描けないのと、同じことではないか。教授とあだ名される無政府主義者は、中間の革命家とそれに相對する警察とを比較して、次のようにいうが、このことばは、まさに、作家の心を代弁するものにちがいない。

「君たちのような革命家は、……実際、君らをおそれている、社会的因襲の奴隷だよ。ちょうど、その因襲の擁護に立ち働らく、警察と同じようにね。明らかにそうなんだ、君たちはその因襲をまったく改革したいと思っているのだから。……君たちは、君らの敵対している勢力——たとえば警察があるね——それと少しも異なる点がない。このまえ、おれは、トットナム・コート・ロードの片隅で、主任警部ヒートとばったり出会った。やっこさんはおれをじいっと見つめた。だが、おれは見なかった。ちらっと視線を流すだけで充分じゃないか。あいつはたくさんのことを考えていたよ——あいつの上役のこととか、自分自身の評判とか、法廷のこととか、自分の給料とか、新聞のこととか——いろいろたくさんのことをね。……おれの考えじゃ、あいつもつまらない人間さ——なんとか比較できるのは、ひとつも思い出せないけれどね——まあ、あげるとすれば、カール・ユントだな。どっちもどっちさ。テロリストと警官は、どっちも、生まれは同じことだよ。革命、遵法——いわば同じゲームの反対の動きさ。ほんとうは、同じ怠惰の変形よ。あいつは自分のちっぽけなゲームをやっている——君たち宣伝にうつつをぬかす人間もそうだよな。……¹⁹⁾」

物語の要約とも思える、こういういい方で、作家コンラッドは、政治の本質とそのメカニズムを凝視してたどりついた、自己の政治認識を明確なものにする。彼にとっては、秩序と無政

府主義とは、たがいに追いかけてこをするような関係にあり、秩序があつてこそ無政府主義が存在し、無政府主義があるからこそ、秩序の意味が生まれてくる。だが、それを担う警察も無政府主義者も、いわば個人的感情で動く、同じ種類の卑俗な人間にすぎず、その秩序も、けつして確かなものとは考えられない。実際、コンラッドが英国に帰化した理由のひとつは、少なくとも、この国が政治的に安定した国である、ということだったはずである。しかしこの国にも、その安定を脅やかす、事件や勢力がいくつもあり、たとえ亡命者ということ抜きにしても、政治的な不安、あるいは危機意識といったものは、彼の心にいつもついてまわってくる。おそらく、コンラッドの作品のなかでは、『密偵』ほど、そういった彼の心情、ひいては政治への懐疑とか不信といわれるもの、もつとも前面にあらわれているのは少ない。だが、政治がこのように、人間の生をおしつぶす巨大な力であり、また、たんなる無意味な企だてというなら、それなら、人びとはいったいどうすればよいか、というたぐいの問題は、この作品の扱うところではない。「『密偵』は、(思考に関するかぎり) 探究や発見の書ではない。それはすでにまとまった見解をドラマ化しており、思いつきふうの論文を越えるものではない²⁰⁾」と考へてよいからである。この作品では政治的なものとして提出された、彼のいわゆる破壊的要素が、不吉などす黒いかたちをなして、500万の人間のすみか、現代都市ロンドンをおおい、そして人びとのあくせく作り出す、不完全な社会を、どこまでもおおっているのである。

NOTES

ジョウゼフ・コンラッドの作品は、現在の Dent's Collected Edition, Dent, London による。

- 1) G. Jean-Aubry: *Joseph Conrad: Life & Letters*, Volume Two, Heinemann, London, 1927, pp. 216-7.
- 2) Albert J. Guerard: *Conrad, the Novelist*, Harvard University Press, Cambridge, 1958, p. 177.
- 3) Douglas Hewitt: *Conrad: A Reassessment*, Bowes & Bowes, London, 1969, p. 88.
- 4) Joseph Conrad: *The Secret Agent*, p. xv.
- 5) *Ibid.*, p. 154.
- 6) *Ibid.*, p. xii.
- 7) *Ibid.*, p. 147.
- 8) *Ibid.*, p. 243.
- 9) Jocelyn Baines: *Joseph Conrad, A Critical Biography*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1967, p. 340.
- 10) Joseph Conrad: *The Secret Agent*, pp. 303-4.
- 11) *Ibid.*, p. 33.
- 12) *Ibid.*, pp. 33-4.
- 13) Joseph Conrad: *Notes on Life and Letters*, p. 99.
- 14) Ian Watt (ed.): *Conrad: The Secret Agent*, A Casebook, Macmillan, London, 1973, p. 34.
- 15) G. Jean-Aubry: *op. cit.*, p. 322.
- 16) *Ibid.*, p. 37.
- 17) Joseph Conrad: *The Secret Agent*, p. 81.
- 18) Joseph Conrad: *Under Western Eyes*, pp. 134-5.
- 19) Joseph Conrad: *The Secret Agent*, p. 69.
- 20) Albert J. Guerard: *op. cit.*, p. 224.